

# 郷土室だより

第155号

平成28年7月31日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 28-042

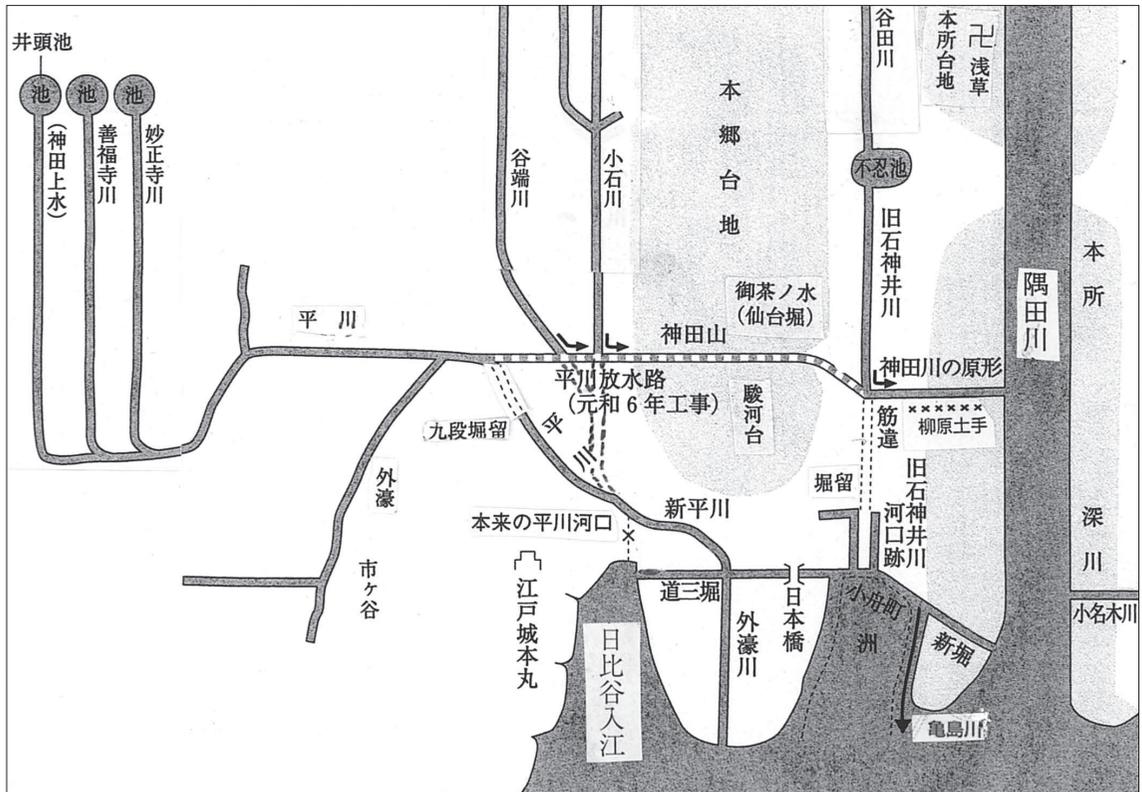
## 『江戸・東京の川』中央区の川(四)

前号では江戸初期の諸大名の蔵屋敷が、隅田川沿いに集中している様子を知ってもらうために、①から②の番号を『武州豊島郡江戸庄図』に書き込んでみました。読者の方から数字が小さくて読めないとの声が寄せられました。申し訳ありませんでした。しかし、番号にマーカーで色を付けると分かりやすくなるこの助言があり、試してみたところ少しは読めるようになりました。

今号から具体的な川の話に入ります。そして、最初は江戸初期の中央区に關係する川の流路の変化をたどることからはじめます。

### ◇江戸のはじまり

家康が入城した当時の江戸は、本郷台地の南に江戸前島と呼ばれる半島状の低地（地形学上は日本橋波蝕台地と呼ばれる）がつづき、西側に（\*）日比谷入江の内海があり、東側は海でした。現在の首都高速都心環状線付近が海岸線です。江戸前島の範囲は、ほぼ現在の千代田区大手町・



神田川と日本橋川「図説 江戸・東京の川と水辺の事典」を基に作成

丸の内・有楽町・内幸町と港区新橋・東新橋、そして中央区の日本橋・京橋・銀座の地域にあたります。

### ◇平川は外濠川（日本橋川）の原形

当時の江戸前島の周辺には、武蔵野台地内を水源とする平川や谷端川、小石川、旧石神井川などが南北に流れ、海に注いでいました。近世都市江戸の建設は、これらの

自然河川を最大限利用し、川筋の付け替えなどを行い、多くの改修を重ねながら、約七〇年という長い年月をかけて行われました。最初にその出発点から確認してみます。

#### \*日比谷入江

JR浜松町駅辺りを入口にして、浜松町・芝大門・芝公園（東部）から新橋・西新橋、さらに日比谷公園・皇居外苑・大手町西部を範囲とした入江。奥行き約四・一キロメートル、平均幅約四〇〇メートルの規模だった。慶長八〜一二（一六〇三〜〇七）年に行われた第一次天下普請で埋め立てられている。

まず平川です。江戸城直下の日比谷入江に河口があった川。家康

が江戸入りした天正一八（一五九〇）年当時、井之頭池と善福寺池、妙正寺池をおもな水源として、ほぼ神田川の流路を流れ、現在のJ

R飯田橋駅付近から九段下を経て、一ツ橋交差点付近で（\*）小石川を合わせて、竹橋辺りで日比谷入江（現・大手濠）に注いでいました。江戸城の平川門や平川濠がその名残です。

#### \*小石川（谷端川）

豊島区要町の栗島神社の弁天池をおもな水源とする。谷端川の下流部にあたる。現在の千川通りに沿って流れ、文京区千石・小石川からJR水道橋駅付近を経て、神保町・一ツ橋交差点付近を流れて平川に合流した。鈴木理生氏は、初期の神田上水の水源を、本郷台地の西側を流れた小石川である、と推定している。

と日本橋川を開削し、さらに小名木川を建設して江東地区の海岸線を確定しました。あわせて平川の東側にバイパスを掘り、道三堀に合流するコースに流路を付け替えています。この付け替え工事は、日比谷入江を埋め立てる準備として行なわれました。

その後、慶長八〜一二（一六〇三〜〇七）年に行なわれた第一次天下普請で、日比谷入江が埋め立てられました。目的は外敵の船が江戸城近くに侵入するのを防ぐこと、城下にふさわしい大名屋敷地を確保すること、そして城郭工事

にともなって出た残土の処理も兼ねてのことでした。日比谷入江の跡地は、曲輪内大名小路（丸の内）、西九下大名小路（皇居外苑）、愛宕下大名小路（西新橋・新橋）と呼ばれる藩邸街に変わりました。同時に、日比谷入江に流入していた小河川や平川の排水路として、外濠と汐留川が造成されています。

### ◇旧石神井川とは

から隅田川に流入する現在の川筋ではなく、本来は飛鳥山西端から旧古川庭園〜中里〜田端〜JR西日暮里駅西側から谷田川の河流を流れ、不忍池に注いでいました。谷田川の河流は、東京メトロ千代田線沿いの千駄木・根津・不忍池・湯島ラインを経て、万世橋付近から昭和通りを流れ「お玉が池」跡から南下して、日本橋小舟町辺りで海に注いでいました。今は姿を消した東堀留川と西堀留川の水路が、旧石神井川河口部の名残とされます。

そして慶長一〇（一六〇五）年、本郷台地の東側を流れる旧石神井川の流路が変更されます。下流部周辺の市街地を、洪水から守るための工事でした。本郷台地東端の筋違橋（現・万世橋辺り）付近から柳橋を経て、隅田川へ合流する水路が掘られ、旧石神井川の流れを付け替えたのです。この工事は、同時期の天下普請に動員された

「西国大名」に命じられています。この付け替えで、下流部の日本橋地域は洪水の被害を受けることがなくなり、旧河口部には東・西の堀留川が造成され、江戸湊の中心の河岸地帯が成立することになります。

家康は江戸入り直後に、道三堀

王子駅の下を流れて豊島・船堀の境

旧石神井川は、滝野川からJR

◇放水路（神田川、仙台堀）がつくられる

武蔵野台地内から流れ出る平川や谷端川、小石川、旧石神井川の下流部では、たびたび洪水による深刻な被害を出していました。幕府は江戸城や市街地を洪水から守るため、元和六（一六二〇）年に

平川の大改修を行いました。本郷台地を掘り割り、飯田橋から水道橋・御茶ノ水・筋違橋につづく放水路（神田川・また仙台の伊達家が行った工事なので仙台堀とも呼ばれる）を開削。その結果、平川と小石川の水路は直角に曲げられて、慶長一〇年に開削された放水路（筋違橋と隅田川）とつながりました。

\*この水路は、水の流れが少なく、小舟が通ることができ程度の水路だったと推定されている。

放水路の完成で、武蔵野台地内からほぼ南北方向に流れ、江戸前島周辺の海に注いでいた平川や谷端川、小石川、旧石神井川の四つの河川は隅田川に流れるようになりました。

その結果、下流部の市街地の洪水が無くなり、土砂による江戸湊の埋没も防止できるようになりました。また工事の揚土を使い、南岸の昌平橋から浅草橋間に洪水防止の堤防（柳原の土手が築かれています。切り離された本郷台地の南端部は、駿河台と呼ばれるようになりまし

た。同時に旧平川の水路は、三崎橋（現・千代田区三崎町三丁目）から九段堀留（同区西神田二丁目）までの約六百メートルが埋め立てられました。この埋め立てで、鉄砲水による洪水がなくなり、埋立地には宅地が造成されています。埋め立て部分の南端が今川小路堀留で、下流部の水路は外濠川と呼ばれ名が変わります。その後、昭和三九（一九六四）年の河川法改正で、日本橋川に改称されています。

◇放水路が運河に変わる

明暦大火後の万治二（一六五九）年に両国橋が完成。そして翌三年

には、放水路の川幅を拡げる工事が行われました。この工事で隅田川から神楽河岸までの水運が可能

となり、放水路が運河（神田川）に変わりました。幕府は「牛込和泉橋間の船入堀」工事として、今回も伊達家に命じています。

この工事で、隅田川から約四キロメートル内陸部の神楽河岸（現・千代田区飯田橋）まで舟運が通じ、山の手地域の開発が可能となりました。ここを拠点にして、牛込・市谷・小石川・早稲田・目白方面の開発がはじまりました。神田川の完成は、江戸城の外郭（外濠）の役割を果たすと同時に、湊（河岸地）の機能を内陸部まで拡大させたことに、大きな意義がありました。神田川の両岸には神楽河岸、飯田河岸、市兵衛河岸、三崎河岸、紅梅河岸、昌平河岸、佐久間河岸、柳原河岸、鞍地河岸、左衛門河岸、浅草茅町河岸など多くの河岸地が成立しています。

◇道三堀と小名木川が最初の運河

運河

濠川に合流する長さ一キロメートルほどの水路。道三堀と銭瓶橋が架かっていました。道三堀の呼び名は、南側に徳川家侍医の今大路道三の屋敷があったことにちなみます。川岸は道三河岸（内河岸）と呼ばれました。

道三堀は、家康が江戸入りした直後に、直営で江戸前島の根元部分を開削した入堀です。江戸城を建設するための資材や物資、生活用品などを、舟で城の近くまで運び入れるための水路としてつくられました。堀の両岸には材木町が成立して、築城用材木の揚場（河岸）となり、ほかに柳町や舟町、四日市町などの城下町（湊町）が成立しました。その後、慶長一一（一六〇六）〜一七（一六四二）年の外濠工事によって、道三堀周辺は城郭内になったため、材木町は楓川西岸沿いに、ほかの町も郭外に移転させられました。

また道三堀の開削によって（\*）

小名木川（\*）新川を經由して、関東最大の塩の生産地である行徳と江戸が直結しました。当時の塩は、生活必需品であるだけでなく、その確保が戦略的にも重要でした

から、この運河の完成には大きな意味をもっていました。

道三堀はほかの水路に比べて早い時期、明治四三（一九一〇）年の最後の市区改正事業で埋め立てられました。

#### \*小名木川

江東区を東西に流れ、隅田川と旧中川を結ぶ。この沿岸運

河の建設は、当時の江東地区の

海岸線を確定するとともに、

以北の干潟化を促進する役割を果たした。そして市街地化

は、隅田川の東岸沿いの本所、深川の微高地と小名木川沿いから進められた。小名木川が江戸期の水運に果たした役割は非常に大きく、江戸の大都

市への発展とともに重要な水路となった。寛永六（一六二九）

年に川幅が拡げられ、隅田川合流点に船番所が設置されて

航行する船の監視を行なった。

#### \*新川

江戸川区の南部を東西に流れ、旧江戸川と中川を結ぶ。船堀川、行徳川とも呼ばれた。行

徳の塩を江戸に運ぶための水路として、小名木川と同時期

に開削された運河。寛永六（一六二九）年に、現在の新川橋

付近から新しい水路が造られて新川となり、旧水路が古川となった。江戸から行徳へ通じる唯一の水路で、小名木川と合わせて行徳川とも呼ぶ。

#### ◇平川から外濠川へ

慶長八（一六一六）〜三〇（一六〇三）〜三七（一六〇七）

年の日比谷入江の埋め立てに合わせ、外濠が造成されたこと、さら

に元和六（一六二〇）年に平川の水路が付け替えとなって、埋め立て部分から下流の水路が外濠川

となったことについては、先に説明したとおりです。

埋め立てられた旧水路は、明治三三（一九〇〇）年の市区改正事業で復活し、三崎橋から分流する

下流部は外濠川となりました。

外濠川は、神田川から千代田区三崎町二丁目まで分かれて神田神保

町・大手町と流れ、内神田二丁目地先で龍閑川を分流、常盤橋の下

流で西から流れてきた道三堀を合わせ、東に日本橋川を分流します。

さらに呉服橋・鍛冶橋へと千代田

区と中央区の区境を南に流れて、京橋川を分流して汐留川に合流しました。

江戸期には「御濠」と呼ばれ、外濠川の呼び名は明治になってからのことです。上流から雉子橋・一ツ橋・神田橋・常磐橋・呉服橋・鍛冶橋・数寄屋橋・山下橋が架か

っていました。

そもそも外濠とは、神田川につ

づいて江戸城の外郭にめぐらされた濠のこと。江戸城の防衛を目的としてつくられた濠でした。元和

六年以降は、濠の役割に加えて、江戸湊とつながる運河の役割も果たすようになりました。城側の岸

は城郭の石垣が築かれていたが、外側の川岸のほとんどが物揚

場（武家地）と河岸地（町人地）として利用されました。

千代田区内には神田川分流地点に三崎河岸、狙（まとい）いた河岸（今川小路堀

留）、小出河岸、錦河岸、鎌倉河岸が成立。中央区内の東岸は、江戸の

経済活動を支えた町人居住地区。日本橋南から京橋、銀座へと商人・職人（工業）の町並がつづき、城辺

河岸（場所によっては呉服河岸、鍋

町河岸）、紺屋河岸、数寄屋河岸、

山城河岸、肴河岸が成立しました。

#### ◇汐留川は排水路

汐留川は、赤坂溜池の余水が千代田区と港区の区境を流れてJR山手線などと交差。さらに中央区

と港区の区境を流れて隅田川に合流しました。途中で外濠川、三十

間堀川、築地川を合わせています。新橋川、離宮川とも呼ばれました。

もとは上流で麴町台地や赤坂台地からの小河川をあわせて、日比谷

入江に流入していましたが、前述のとおり日比谷入江の埋め立てにともない、溜池や小河川の排水路として、あらためて掘られた水路です。

外濠と運河の役割も果たしました。

上流の溜池（江戸の初期には上水の水源だった）に、潮の干満の

影響が及ばぬように堰堤がつくられ、海からの汐水を止めたことか

ら汐留川の名がつけられました。水路には土橋、難波橋、新橋（芝口橋）

蓬萊橋、仙台橋、浜離宮表門橋が架かり、川岸には屋形河岸、芝口

（蔵地）河岸が成立しています。

（以下次号）  
（菅原健二）